

男子部中等科2年

「古墳からの学び—史跡探索による歴史の再現—」

角田 望

古墳について私は、授業実践を年報に書いたことがあった（本誌14号、2010年）。古墳は、律令国家として中央集権化が進展する以前の日本列島の姿を示すものであり、ヤマト朝廷と地方の関係を示すものである。中等科2年生の授業を深め、史跡探索という実践によって古代日本、特に「武蔵国」とされる関東平野の実態に少しでも迫ろうというのが今回の取り組みである。

多摩川下流域（南武蔵）の荏原<多摩川台>古墳群は、古墳前期の呪術的な性格を示す点、さらに海岸部からヤマト政権と繋がる勢力が誕生したことを示す点で注目される。それに対して荒川中流域（北武蔵）のさきたま古墳群は、稲荷山古墳で明らかなように5世紀にヤマト政権によって地方の勢力が誕生したことを示している。6世紀の両者を比較すると、荏原古墳群は縮小傾向にあり、さきたま古墳群は再巨大化する傾向を確認することができる。このようにヤマト政権との関係において地方の首長は大きく変動するのである。7世紀には終末期古墳が造られるようになった。このように古代の武蔵国の発展を体感できるのが古墳である。

I. はじめに

今回の報告会は、テーマを立ち上げて生徒を募集することから始まった。5月末には「遺跡探索による歴史の再現」というテーマを掲げて中等科2年に対象を絞った。それは、古代を取り上げている授業を深めるというスタイルを取りたかったからである。他の学年からも歴史を取り上げたいという希望者がいたが、個人ではなく、クラスとしての学びの深化が念頭にあったので学年を越えずに2年生に絞ることにした。最終的には2年生20人が集まってくれた。また、生徒から具体的なテーマを募ったが案はでなかったため、教師が主導してテーマを展開することになった。

II. 準備と取り組み

9月から古墳の下見を進めた。10日には多摩川下流域、田園調布にある「荏原古墳群」を見学した。南武蔵の古墳を理解することは関東平野の古墳時代を押さえる点でひとつの柱ともなるからである。まとまった「古墳群」が確認されること、さらに「古墳展示室」が充実しており、生徒が学ぶには適切であることを確認することができた。さらに17日、24日は北武蔵、荒川右岸の「さきたま古墳群」を見学した。武蔵国では中心的な古

墳であり、稲荷山古墳はそこから出土した鉄剣によってどの教科書にも取り上げられている。巨大な古墳がいくつも展開していることを確認し、「史跡の博物館」で学芸員の方に相談し、文献をコピーすることもできた。そこからは、教師として古墳の研究に取り組むことになった。北武蔵（さきたま古墳群）と南武蔵（荏原古墳群）の関係を押えるためには「武蔵国造の乱」をどのように理解するかが重要であった。史跡の博物館学芸員の利根川氏には私の理解を手紙にしてご意見を伺った（21日）。利根川氏は丁寧な添削で答えてくださり、定説と問題点を確認することができた。

生徒達の準備期間は古墳の説明からではなく、遺跡探索という実習から始めた。それまでにリーダー決め（小林多治生）や簡単な構想を説明する機会があったものの、終日準備となった11月4日にはバスに乗り荏原古墳群に全員で出かけることになった。残念ながら野毛古墳群にまで足を伸ばすことができなかったが、展示室には「武蔵国造の乱」についても取り上げられており生徒達の興味を引くことができた。翌5日にもバスでさきたま古墳群に全員で出かけた。ここでは稲荷山古墳などの見学、將軍塚古墳は内部の見学をすることができた。午後には史跡の博物館の利根川氏に対

応していただき、疑問を深める機会を作ることができた。文献による学習から入らずに最初に古墳という遺跡探索を行い、いわば考古学的な入口から考えさせるという道を選んだのである。

6日には見学の内容を確認し疑問を出し合った。テーマによってどのような疑問に答えるかを確認して7つのグループが最初に動き始めた。そのなかで古墳の大きさや年代を図式化しようという案を出し全体にも目配りしようとする生徒もいた。そこからは参考資料や文献を読み、図書館で調べる時間が取られた。それぞれの発表をしたのが9日のことであった。その後、報告のためのグループ再編成、パワーポイント作り、さらには原稿作りとその推敲が続き、14日の本番まで忙しい毎日が続いた。そのなかでも2人の生徒(平井、赤木)は、発砲スチロールによる200分の1の古墳の模型作りにも没頭しており、極めて精巧な古墳の模型を完成させて当日展示することができた。

Ⅲ. 報告内容

1. 古墳の出現(古墳前期)

「どうして古墳が造られるようになったのか」という疑問に対しては、4世紀に朝鮮半島で独立の気運が高まったのに対応して、「朝鮮や中国からの鏡や鉄剣などを各地にもたらす中央権力としてのヤマト政権が誕生したから」ということができます。

武蔵国においては最初に東京湾に近い地域に一荏原古墳群に現れているように4世紀には古墳が登場しています。鉄剣、勾玉などはヤマト政権との繋がりを持つ首長の副葬品と考えられます。

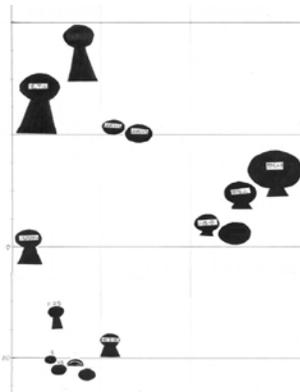


図1 荏原古墳群の規模と年代

2. 古墳の発展(古墳中期)

武蔵国北部に古墳が登場するのが5世紀末です。全長120メートルにもなる稲荷山古墳が、いきなり出現しています。弓矢、太刀、冑といった武人の副葬品が出ています。これは、有名な鉄剣にある「ヲワケ」が朝廷に仕えることによってこの地方に強大な軍事的な権力を誇ったことをよく示しています。冑の埴輪は、この首長の武人的な風貌に繋がるものを感じます。

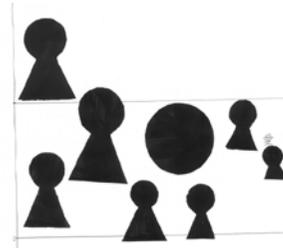


図2 さきたま古墳群の規模と年代



図3 稲荷山古墳出土の武人の埴輪
埼玉県立さきたま史跡の博物館
『ガイドブックさきたま』14頁より

3. 6世紀の武蔵の古墳動向

古墳後期とされる6世紀に「武蔵国造の乱」が起きたと日本書紀が記しています。これはヤマト政権に反逆する首長として小杵が、笠原直使主によって討伐され朝廷に直属する「屯倉」が設けられたというものです。

荏原古墳群では6世紀始めに浅間山神社古墳が現れますが(60m)、6世紀後半には小型の円墳しか造立されなくなります。他方、さきたま古墳群では、6世紀前半には瓦塚古墳(73m)と小型化するものの、6世紀後半に登場する將軍塚古墳(102m)は再び巨大化しています。

このことから、荏原古墳群の首長は討伐された

「小杵」であり、さきたま古墳群の首長がヤマト政権と繋がった「笠原直使主」ではなかったかという「仮説」も可能となるのです。もちろん歴史学と考古学を簡単に結びつけるのは難しいのですが、武蔵国全体の動向を見る必要があることは確かです。

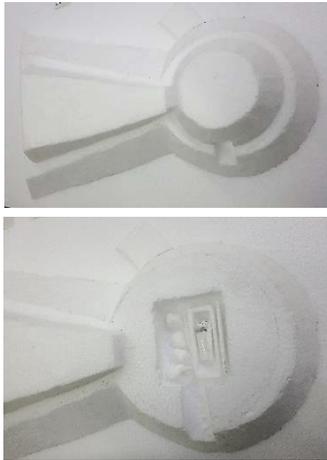
4. 古墳の終焉 7世紀

「どうして古墳が造られなくなったのか」という疑問に答えるのも簡単ではありません。ひとつの説明は、仏教の導入によって火葬が奨励され、薄葬令などによって徹底していったことです。他方では律令制度による中央集権化が新しい段階を迎え、地方の首長の時代が終わりを告げたと理解することも重要です。

終末期の古墳は地方の役人である国司を埋葬した特殊な古墳であり、さきたま古墳から少し離れた八幡山古墳からは漆を使った棺が出土しています。

IV. 感想と評価

図4 生徒が1/200で作成した稲荷山古墳



古墳のモデルを作成した生徒は次の感想を報告会で伝えた。「実際に（古墳を）見てみると土だけでここまで美しいものが造れることがすばらしい。教科書の小さな写真ではその迫力が伝わらない。大型古墳を造れるだけの権力を持っていることがスゴイ！副葬品、埴輪などを作った技術がすばらしい！今から1400年以上も前にこれだけの古墳を造れたことが信じられない」

若い感性で古墳を感じ取ったことが、まさにこ

の模型に表されていた。生徒が指摘しているように「小さな写真」に留まらずに史跡の探索をしたことが歴史の営みへの深い興味と関心に繋がったと言えるだろう。

また「武蔵国造の乱」への取り組みは、中等科2年生では難しいところもあり、無理に勧められなかった。ところが、生徒の方（内藤）から「古墳との深い繋がりがありますよね」と積極的に文章化してくれ、教師としては非常に嬉しかった。この乱が考古学的な厳密な意味では「虚構」であるとしても、古墳造営の断面が認められヤマト政権によって地方首長が変動したことは確かなのである。それを読み説こうとした生徒達の努力は貴重である。

このように生徒達は主体的に歴史を深く学ぶことができた。ただ、調べ方には問題点を感じた。生徒達は調べる時に文献によらずウェブ上ホームページなどの情報をそのまま持ってこようとする傾向があった。残念ながら電子情報を批判的に理解することには限界があった。批判的な情報の精査は高等科での課題としなくてはならない。

VI. おわりに

報告会終了後の仕事として、作成した古墳模型をさきたま古墳の史跡の博物館に寄贈することがあった。生徒としても丹精込めて造った模型を教師室の奥に放置するのはしのびなかった。すぐには実現しなかったものの、新年度も落ち着いた6月19日生徒一人と私は、（実は自転車で）荒川を遡って行田市まで模型を運ぶことができた。博物館の学芸員の方にも親切に対応していただき、この場を借りて感謝申し上げたい。あの日に生徒達の古墳への学びは終止符を打ったのである。

VII. 参考文献

- (1)杉原荘介、竹内理三編『古代の日本7関東』角川書店、1970年
- (2)大田区立郷土博物館『大田区 古墳ガイドブック』1992年
- (3)さきたま史跡の博物館『古墳の終焉と律令時代の幕開け（平成27年企画展）』2015年
- (4)利根川章彦『「武蔵国造の乱」はあったか』さきたま資料館『調査研究報告』16号2003年